

# 新規上場申請のための四半期報告書

(第6期第2四半期)

自 2021年12月1日

至 2022年2月28日

株式会社プログリット

# 目 次

頁

表 紙

第一部 企業情報 .....	1
第1 企業の概況 .....	1
1 主要な経営指標等の推移 .....	1
2 事業の内容 .....	2
第2 事業の状況 .....	3
1 事業等のリスク .....	3
2 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 .....	3
3 経営上の重要な契約等 .....	4
第3 提出会社の状況 .....	5
1 株式等の状況 .....	5
(1) 株式の総数等 .....	5
(2) 新株予約権等の状況 .....	5
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等 .....	5
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移 .....	5
(5) 大株主の状況 .....	6
(6) 議決権の状況 .....	6
2 役員の状況 .....	6
第4 経理の状況 .....	7
1 四半期財務諸表 .....	8
(1) 四半期貸借対照表 .....	8
(2) 四半期損益計算書 .....	9
第2 四半期累計期間 .....	9
(3) 四半期キャッシュ・フロー計算書 .....	10
2 その他 .....	14
第二部 提出会社の保証会社等の情報 .....	15

[四半期レビュー報告書]

**【表紙】**

【提出書類】	新規上場申請のための四半期報告書
【提出先】	株式会社東京証券取引所 代表取締役社長 山道 裕己 殿
【提出日】	2022年8月24日
【四半期会計期間】	第6期第2四半期（自 2021年12月1日 至 2022年2月28日）
【会社名】	株式会社プログリット
【英訳名】	PROGRIT Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 岡田 祥吾
【本店の所在の場所】	東京都千代田区有楽町2丁目10番1号 東京交通会館ビル5階
【電話番号】	03-6381-7760（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 CFO 管理部長 谷内 亮太
【最寄りの連絡場所】	東京都千代田区有楽町2丁目10番1号 東京交通会館ビル5階
【電話番号】	03-6381-7760（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 CFO 管理部長 谷内 亮太

## 第一部【企業情報】

### 第1【企業の概況】

#### 1【主要な経営指標等の推移】

回次		第6期 第2四半期累計期間	第5期
会計期間		自 2021年9月1日 至 2022年2月28日	自 2020年9月1日 至 2021年8月31日
売上高	(千円)	1,082,470	1,981,101
経常利益又は経常損失(△)	(千円)	160,347	△46,911
四半期純利益又は当期純損失(△)	(千円)	109,454	△76,826
持分法を適用した場合の投資利益	(千円)	—	—
資本金	(千円)	118,454	83,454
発行済株式総数	(株)	3,444,627	3,398,022
純資産額	(千円)	332,075	159,324
総資産額	(千円)	1,314,844	1,032,917
1株当たり四半期純利益又は1株当たり 当期純損失(△)	(円)	31.91	△22.89
潜在株式調整後1株当たり四半期(当 期)純利益	(円)	—	—
1株当たり配当額	(円)	—	—
自己資本比率	(%)	25.1	15.3
営業活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	192,477	△85,669
投資活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	10,520	3,665
財務活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	110,531	7,782
現金又は現金同等物の四半期末(期 末)残高	(千円)	731,179	417,649

回次		第6期 第2四半期会計期間
会計期間		自 2021年12月1日 至 2022年2月28日
1株当たり四半期純利益	(円)	12.42

- (注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりませんので、連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移については記載しておりません。
2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。
3. 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益については、潜在株式は存在するものの、当社株式は非上場であり、期中平均株価が把握できず、また、第5期は1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。
4. 1株当たり配当額は配当を実施していないため、記載しておりません。
5. 当社は、第5期第2四半期累計期間については四半期財務諸表を作成していないため、第5期第2四半期累計期間に係る主要な経営指標等の推移については記載しておりません。
6. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第1四半期会計期間の期首から適用しており、当第1四半期累計期間に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

## 2 【事業の内容】

当第2四半期累計期間において、当社が営む事業の内容について、重要な変更はありません。

## 第2【事業の状況】

### 1【事業等のリスク】

当第2四半期累計期間において、新たな事業等のリスクの発生、または、新規上場申請のための有価証券報告書（Iの部）に記載した事業等のリスクについて重要な変更はありません。

### 2【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期会計期間の末日現在において判断したものであります。なお、当社は、前第2四半期累計期間については四半期財務諸表を作成していないため、前年同四半期累計期間との比較分析は行っておりません。

#### (1) 財政状態及び経営成績の状況

##### ①経営成績に関する説明

当第2四半期累計期間における当社を取り巻く経営環境につきましては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響が長期化する中、ワクチン接種進展の効果が期待される一方で、変異株による感染拡大が懸念されております。そのため依然として収束時期が見通せないことから、先行き不透明な状況が続いております。また、海外への渡航制限によって海外転勤・出張や海外旅行が減少しTOEIC®の公開テスト中止によって試験対策ニーズも後退するなど、目先の英語学習目的が薄れたことにより、足許の英語学習市場において事業拡大を図っていた短期集中型スクールも影響を受けたものとみられます。

しかしながら、ビジネスのグローバル化への対応に関する企業の危機意識は依然として高く、期待した成果を上げられていなかった従来型の英会話サービスから英語コーチングサービスへの乗り換えの動きも散見されるようになりました。また、個人においても新型コロナウイルス感染症の終息後を見据えて語学学習を再開する動きもみられており、中長期的な英語の学習ニーズは堅調に推移すると見込んでおります。

このような環境の中、当社におきましては、英語コーチングサービス「プログリット」において、集中学習によって飛躍的に英語力を向上させるために、①顧客ごとにカスタマイズしたカリキュラムの設計、②英語学習を継続させる習慣を身につけるためのコンサルタントによるサポート、という主に2つの特徴において、継続的な品質向上と改善に取り組んでおります。

また、「プログリット」の個人顧客の獲得に尽力する一方で、法人顧客の獲得は堅調に増加しました。また、サブスクリプション型のサービスである「シャドテン」の累積数の増加が収益基盤の下支えとなりました。

以上の結果、当第2四半期累計期間の売上高は1,082,470千円、営業利益は161,555千円、経常利益は160,347千円、四半期純利益は109,454千円となりました。

なお、当社は「英語コーチング事業」の単一セグメントであるため、セグメントごとの記載をしておりません。

##### ②財政状態の分析

###### (資産)

当第2四半期会計期間末時点における総資産は1,314,844千円となり、前事業年度末日に比べ281,926千円増加しました。これは主に、現金及び預金が313,529千円増加したことによるものであります。

###### (負債)

当第2四半期会計期間末時点における負債合計は982,768千円となり、前事業年度末に比べ109,175千円増加しました。これは主に、未払法人税等が58,027千円、契約負債(旧前受金)が41,138千円増加したことによるものであります。

###### (純資産)

当第2四半期会計期間末時点における純資産は332,075千円となり、前事業年度末に比べ172,751千円増加しました。これは資本金が35,000千円、資本剰余金が35,000千円それぞれ増加し、利益剰余金が102,750千円増加したことによるものであります。

(2) キャッシュ・フローの状況

当第2四半期累計期間における現金及び現金同等物は、前事業年度末より313,529千円増加し、731,179千円となりました。当第2四半期累計期間における各キャッシュ・フローの状況とその要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果使用した現金及び現金同等物は、192,477千円となりました。主な要因といたしましては、税引前四半期利益160,347千円の計上、法人税等の還付による増加39,312千円、契約負債の増加30,892千円、未払金の減少37,138円等によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した現金及び現金同等物は、10,520千円となりました。主な要因といたしましては、敷金の返還による収入11,388千円等によるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した現金及び現金同等物は、110,531千円となりました。要因といたしましては、長期借入による収入80,000千円と株式発行による収入70,000千円、長期借入金の返済56,169千円によるものであります。

(3) 会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

新規上場申請のための有価証券報告書（Iの部）に記載した「経営者による財政状況、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析」における会計上の見積りを当該見積りに用いた仮定の記載について重要な変更はありません。

(4) 経営方針・経営戦略等

当第2四半期累計期間において、当社が定めている経営方針・経営戦略等について重要な変更はありません。

(5) 優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

当第2四半期累計期間において、当社が優先的に対処すべき事業上の課題について重要な変更はありません。

(6) 研究開発活動

該当事項はありません。

### 3 【経営上の重要な契約等】

当第2四半期会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

### 第3【提出会社の状況】

#### 1【株式等の状況】

##### (1)【株式の総数等】

###### ①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	100,000,000
計	100,000,000

###### ②【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間末 現在発行数(株) (2022年2月28日)	提出日現在発行数(株) (2022年8月24日)	上場金融商品取引所名又は 登録認可金融商品取引業 協会名	内容
普通株式	3,444,627	3,444,627	非上場	完全議決権株式であり、株主として権利内容に何ら制限のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
計	3,444,627	3,444,627	—	—

(注) 2022年7月13日開催の臨時株主総会決議により、同日付で1単元を100株とする単元株制度を採用しております。

##### (2)【新株予約権等の状況】

###### ①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

###### ②【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

##### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

##### (4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2021年12月1日～ 2022年2月28日	-	3,444,627	-	118,454	-	115,454



## (5) 【大株主の状況】

2022年2月28日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式（自己株式を除く。）の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
岡田 祥吾	東京都品川区	1,058,000	30.71
株式会社岡田祥吾事務所	東京都千代田区有楽町二丁目10番1号	878,213	25.50
株式会社HOHETO	東京都千代田区有楽町二丁目10番1号	479,371	13.92
山崎 峻太郎	神奈川県藤沢市	465,000	13.50
瀧本 哲功	東京都豊島区	135,000	3.92
株式会社シグマクス・インベ ストメント	東京都港区	33,289	0.97
菊嶋 宏	東京都世田谷区	31,500	0.91
MTパートナーズ株式会社	東京都港区	31,500	0.91
谷家 衛	1 Austin Road West, Kowloon, Hong Kong	31,500	0.91
島田 亨	神奈川県鎌倉市	31,500	0.91
野田 豊	東京都港区	31,500	0.91
平野 正雄	東京都世田谷区	31,500	0.91
溝口 勇児	東京都港区	31,500	0.91
計	—	3,269,373	94.91

## (6) 【議決権の状況】

## ① 【発行済株式】

2022年2月28日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	—	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 3,444,200	34,442	完全議決権株式であり、株主としての権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であります。
単元未満株式	普通株式 427	—	—
発行済株式総数	普通株式 3,444,627	—	—
総株主の議決権	—	34,442	—

## ② 【自己株式等】

該当事項はありません。

## 2 【役員の状況】

該当事項はありません。

## 第4【経理の状況】

### 1. 四半期財務諸表の作成方法について

当社の四半期財務諸表は、「四半期財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第63号）に基づいて作成しております。

### 2. 監査証明について

当社は、株式会社東京証券取引所の「有価証券上場規程」第216条第6項の規定に基づき、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に準じて、第2四半期会計期間（2021年12月1日から2022年2月28日まで）及び第2四半期累計期間（2021年9月1日から2022年2月28日まで）に係る四半期財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人による四半期レビューを受けております。

### 3. 四半期連結財務諸表について

当社は子会社がありませんので、四半期連結財務諸表を作成しておりません。

### 4. 最初に提出する四半期報告書の記載上の特例

当新規上場申請のための四半期報告書は、「企業内容等開示ガイドライン24の4の7-6」の規定に準じて前年同四半期との対比は行っておりません。

## 1 【四半期財務諸表】

## (1) 【四半期貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年8月31日)	当第2四半期会計期間 (2022年2月28日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	437,649	751,179
売掛金	19,330	39,254
商品	19,014	19,226
貯蔵品	1,831	1,947
前払費用	47,304	48,172
その他	40,569	405
流動資産合計	565,699	860,186
固定資産		
有形固定資産		
建物	139,128	131,267
工具、器具及び備品	5,369	4,728
有形固定資産合計	144,498	135,995
無形固定資産	463	249
投資その他の資産		
出資金	20	20
長期前払費用	362	852
繰延税金資産	83,554	87,099
敷金	237,519	229,642
その他	800	800
投資その他の資産合計	322,256	318,413
固定資産合計	467,218	454,658
資産合計	1,032,917	1,314,844
負債の部		
流動負債		
買掛金	5,520	8,626
1年内返済予定長期借入金	111,417	122,220
短期借入金	8,300	25,000
未払金	115,351	83,987
未払費用	60,035	51,665
未払法人税等	1,541	59,568
前受金	327,961	-
契約負債	-	369,099
預り金	16,838	13,598
賞与引当金	41,397	36,165
その他	12,203	26,780
流動負債合計	700,565	796,713
固定負債		
長期借入金	168,534	181,562
資産除去債務	4,493	4,493
固定負債合計	173,027	186,055
負債合計	873,593	982,768
純資産の部		
株主資本		
資本金	83,454	118,454
資本剰余金	80,454	115,454
利益剰余金	△6,091	96,658
株主資本合計	157,816	330,567
新株予約権	1,508	1,508
純資産合計	159,324	332,075
負債純資産合計	1,032,917	1,314,844

## (2) 【四半期損益計算書】

## 【第2四半期累計期間】

(単位：千円)

	当第2四半期累計期間 (自 2021年9月1日 至 2022年2月28日)
売上高	1,082,470
売上原価	364,408
売上総利益	718,061
販売費及び一般管理費	556,505
営業利益	161,555
営業外収益	
利子補給金	229
還付加算金	178
その他	159
営業外収益合計	567
営業外費用	
支払利息	1,675
その他	100
営業外費用合計	1,776
経常利益	160,347
特別損失	
固定資産除却損	0
特別損失合計	0
税引前四半期純利益	160,347
法人税、住民税及び事業税	50,892
法人税等合計	50,892
四半期純利益	109,454

## (3) 【四半期キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

当第2四半期累計期間  
(自 2021年9月1日  
至 2022年2月28日)

営業活動によるキャッシュ・フロー	
税引前四半期純利益	160,347
減価償却費及びその他の償却費	8,595
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△5,231
受取利息及び受取配当金	△2
支払利息	1,675
売上債権の増減額 (△は増加)	△19,923
棚卸資産の増減額 (△は増加)	△328
仕入債務の増減額 (△は減少)	3,106
未払金の増減額 (△は減少)	△37,138
未払費用の増減額 (△は減少)	△8,370
前払費用の増減額 (△は増加)	△868
契約負債の増減額 (△は減少)	30,892
その他	23,624
小計	156,379
利息及び配当金の受取額	2
利息の支払額	△1,675
法人税等の支払額	△1,541
法人税等の還付額	39,312
営業活動によるキャッシュ・フロー	192,477
投資活動によるキャッシュ・フロー	
有形固定資産の取得による支出	△278
敷金の返還による収入	11,388
その他	△590
投資活動によるキャッシュ・フロー	10,520
財務活動によるキャッシュ・フロー	
短期借入れによる収入	40,000
短期借入金の返済による支出	△23,300
長期借入れによる収入	80,000
長期借入金の返済による支出	△56,169
株式の発行による収入	70,000
財務活動によるキャッシュ・フロー	110,531
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	313,529
現金及び現金同等物の期首残高	417,649
現金及び現金同等物の四半期末残高	731,179

## 【注記事項】

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を第1四半期会計期間の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することといたしました。これにより、プログラムコースの収益認識において、従来は顧客のプログラム開始日からプログラム終了日までの期間の経過により収益を認識しておりましたが、顧客の休会期間や当社の非営業期間を除いた役務の提供期間において、進捗度に基づき収益を認識する方法に変更しております。

また、顧客との約束が財又はサービスを他の当事者によって提供されるように手配する履行義務である場合には、代理人として純額で収益を認識する方法に変更いたしました。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、第1四半期会計期間の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、第1四半期会計期間の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、当第2四半期累計期間の売上高は8,272千円増加し、売上原価は1,743千円減少し、営業利益、経常利益及び税引前四半期純利益はそれぞれ10,015円増加しております。また、利益剰余金の当期首残高は6,704千円減少しております。

収益認識会計基準等を適用したため、前事業年度の貸借対照表において、「流動負債」に表示していた「前受金」は、第1四半期会計期間より「契約負債」に含めて表示することとしました。なお、収益認識会計基準第89-2項に定める経過的な取扱いに従って、前事業年度について新たな表示方法により組替えを行っております。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を第1四半期会計期間の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、四半期財務諸表に与える影響はありません。

(四半期財務諸表の作成にあたり適用した特有の会計処理)

(税金費用の計算)

税金費用については、当第2四半期会計期間を含む事業年度の税引前当期純利益に対する税効果会計適用後の実効税率を合理的に見積り、税引前四半期純利益に当該見積実効税率を乗じて計算しております。

(四半期貸借対照表関係)

※1 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行2行と当座貸越契約を締結しております。当第2四半期会計期間末における当座貸越契約に係る借入未実行残高等は次のとおりであります。

	前事業年度 (2021年8月31日)	当第2四半期会計期間 (2022年2月28日)
当座貸越極度額	197,000千円	130,000千円
借入実行残高	8,300	25,000
借入未実行残高	188,700	105,000

(四半期損益計算書関係)

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	当第2四半期累計期間 (自 2021年9月1日 至 2022年2月28日)
賞与引当金繰入額	16,007千円
広告宣伝費	176,744千円
給料手当	137,254千円

(四半期キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の四半期末貸借対照表に記載されている科目の金額との関係は次の通りであります。

	当第2四半期累計期間 (自 2021年9月1日 至 2022年2月28日)
現金及び預金	751,179千円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	△20,000千円
現金及び現金同等物	731,179千円

(株主資本等関係)

当第2四半期累計期間 (自 2021年9月1日 至 2022年2月28日)

1. 配当金支払額

該当事項はありません。

2. 基準日が当第2四半期累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期会計期間の末日後となるもの

該当事項はありません。

3. 株主資本の金額の著しい変動

当社は、2021年10月29日付で、株式会社シグマックス・インベストメントと株式会社協和より、第三者割当増資の払込を受けました。この結果、第2四半期累計期間において、資本金及び資本剰余金がそれぞれ35,000千円増加し、第2四半期会計期間末において、資本金が118,454千円、資本剰余金が115,454千円となっております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

第2四半期累計期間 (自 2021年9月1日 至 2022年2月28日)

当社は、英語コーチング事業の単一セグメントであるため、開示を省略しております。

(収益認識関係)

(顧客との契約から生じる収益を分解した情報)

売上高はすべて顧客との契約から生じたものであります。また、当社は英語コーチング事業の単一セグメントであり、財又はサービスの種類別に分解した収益は、以下のとおりであります。

(単位：千円)

当第2四半期累計期間 (自 2021年9月1日 至 2022年2月28日)	
英語コーチングサービス	875,126
サブスクリプション型 英語学習サービス	207,344
顧客との契約により生じる収益	1,082,470
外部顧客への売上高	1,082,470

(注) 英語コーチング事業は英語コーチングサービスとサブスクリプション型英語学習サービスの2つのサービスにより構成されております。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当第2四半期累計期間 (自 2021年9月1日 至 2022年2月28日)
1株当たり四半期純利益	31円91銭
(算定上の基礎)	
四半期純利益(千円)	109,454
普通株主に帰属しない金額(千円)	-
普通株式に係る四半期純利益(千円)	109,454
普通株式の期中平均株式数(株)	3,429,693
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり四半期純利益の算定に含めなかった潜在株式で、前事業年度末から重要な変動があったものの概要	-

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益については、潜在株式は存在するものの、当社株式は非上場であり、期中平均株価が把握できないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。



## 2 【その他】

該当事項はありません。

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

# 独立監査人の四半期レビュー報告書

2022年8月15日

株式会社プログリット

取締役会 御中

## EY新日本 有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士

池内基明

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士

原賀恒一郎

### 監査人の結論

当監査法人は、株式会社東京証券取引所の「有価証券上場規程」第216条第6項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている株式会社プログリットの2021年9月1日から2022年8月31日までの第6期事業年度の第2四半期会計期間（2021年12月1日から2022年2月28日まで）及び第2四半期累計期間（2021年9月1日から2022年2月28日まで）に係る四半期財務諸表、すなわち、四半期貸借対照表、四半期損益計算書、四半期キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に準拠して、株式会社プログリットの2022年2月28日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項が全ての重要な点において認められなかった。

### 監査人の結論の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。四半期レビューの基準における当監査法人の責任は、「四半期財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

### 四半期財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に準拠して四半期財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

四半期財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき四半期財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

#### 四半期財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した四半期レビューに基づいて、四半期レビュー報告書において独立の立場から四半期財務諸表に対する結論を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に従って、四半期レビューの過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対する質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続を実施する。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。
- ・ 継続企業の前提に関する事項について、重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められると判断した場合には、入手した証拠に基づき、四半期財務諸表において、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に準拠して、適正に表示されていないと信じさせる事項が認められないかどうか結論付ける。また、継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、四半期レビュー報告書において四半期財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する四半期財務諸表の注記事項が適切でない場合は、四半期財務諸表に対して限定付結論又は否定的結論を表明することが求められている。監査人の結論は、四半期レビュー報告書日までに入手した証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 四半期財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に準拠していないと信じさせる事項が認められないかどうかとともに、関連する注記事項を含めた四半期財務諸表の表示、構成及び内容、並びに四半期財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示していないと信じさせる事項が認められないかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した四半期レビューの範囲とその実施時期、四半期レビュー上の重要な発見事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上